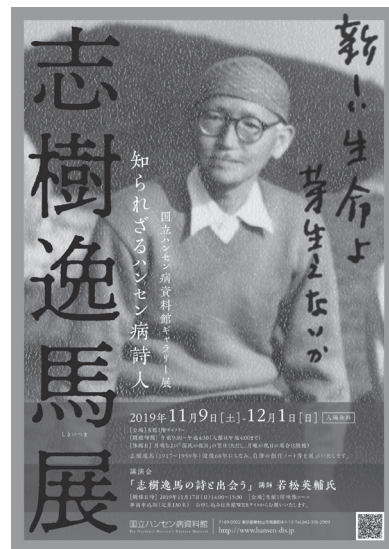


## 〔論文〕

# よみがえるハンセン病詩人・志樹逸馬

—遺稿ノートから明らかになったこと—

木村 哲也（国立ハンセン病資料館）



写真①② ギャラリー展「没後60年・志樹逸馬展」の展示風景とポスター

## 1. はじめに—問題の所在

国立ハンセン病資料館では、2019年11月9日～12月1日にかけて、ギャラリー展「没後60年・志樹逸馬展」を開催した（写真①②）。この展示の担当者として、展示をつくる過程で明らかとなった事実を、本稿にまとめておきたい。

志樹逸馬（1917～1959年）は、ハンセン病療養所を代表する詩人である。1930年に全生病院（現・多磨全生園）に入院したのち、1933年に長島愛生園に転園。長島詩謡会の代表もつとめた。長島愛生園の園内誌『愛生』等に多くの詩を発表し、詩人の藤本浩一、永瀬清子、大江満雄や、哲学者の鶴見俊輔らと親交を結び、高く評価されている。生前、個人詩集は出されなかったが、没後、原田憲雄・原田禹雄編『志樹逸馬詩集』（方向社、1960年）、小沢貞雄・長尾文雄編『島の四季』（編集工房ノア、1984年）、若松英輔編『新編・志樹逸馬詩集』（亜紀書房、2019年）の3冊の詩集が編まれている。神谷美恵子『生きがいについて』（みすず書房、1966年）で詩が引用され、広く知られ

るようになった。

今回の展示にあたっては、志樹逸馬の遺族から遺稿ノートすべてにあたる53冊の提供を受けた<sup>(1)</sup>。これらのノートが一般に公開されるのは、今回が初めてである。この中には、未発表と思われる詩稿も相当数見られる。すでに活字となって発表された作品であっても、異なるバージョンが存在し、元になる草稿を時間をかけて推敲し、清書して仕上げてゆく過程をたどることもできる貴重な資料群である。本稿でも、これらの遺稿ノートを中心的な資料として扱う。

没後に編まれた『志樹逸馬詩集』に61篇、『島の四季』に51篇、『新編 志樹逸馬詩集』に123篇収録されている詩は、ほとんどが志樹逸馬の遺稿ノートから採られており<sup>(2)</sup>、園内誌に発表された多くの作品の大部分は初出誌に載ったきり埋もれたままであることも、このたびの資料調査で明らかとなった。志樹逸馬の詩業の全貌が明らかとなる日は、今後に俟たねばならない。

今回、展示の準備過程で、志樹逸馬が使用した

(1) 『童謡』2冊、『詩謡集』2冊、『詩集』2冊、『詩作ノート』13冊、『感想録』8冊、『如何に生きるか』4冊、『折にふれて』1冊、『日記』15冊、『雑』6冊。合計53冊。

(2) ただし、遺稿ノートの内容そのままではなく、多くの場合、詩句に改変がなされていることも判明した。志樹逸馬没後であるため本人の手によるとは考えられず、いかなる経緯で改変が加えられたのか、今後の研究が待たれる。

筆名が三通りあることも確認できた。初期には、本名の宝山良三（1935年12月～1948年4月『愛生』誌で使用。以下同じ）をはじめ、卯月香（1936年5月～1939年3月使用）、志樹逸馬（1937年8月～亡くなるまで）を並行して用い<sup>(3)</sup>、当初は、詩、童謡、民謡、小曲など、ジャンルも定まっていなかった。『愛生』をはじめとする園内誌に発表した作品は、宝山良三名義25篇、卯月香名義18篇、志樹逸馬名義213篇の合計256篇である<sup>(4)</sup>。

本論に入る前に、これまで、志樹逸馬について論じられた先行研究を見ておきたい。さしあたり以下の四本を挙げることができる。

亀田政則は、志樹逸馬を「キリスト教詩人」としてとらえ、志樹の詩作品にいかなる宗教哲学が織り込まれているかを解明しようとしている<sup>(5)</sup>。ただし、志樹逸馬の作品を時系列でたどることをしていないため、志樹作品の変化の相を理解するには課題が残るものである。

込山志保子は、遺族から提供を受けた遺稿ノートを通して初めての分析を行い、志樹の詩の表現の特徴を、「生命（いのち）と死」「自らの存在と価値」「孤独とユーモア」「自然界の見つめ方」「直喩と暗喩と散文」「逸馬のイエス」の6点にまとめて見せた<sup>(6)</sup>。今後も志樹作品を論じるうえで参照されるべき論点である。しかし込山は、志樹にとって重要だと思われるハンセン病そのものの影響を「私には、その議論を論じるにふさわしくないように思う」として、検討から外している。志樹作品とハンセン病との影響関係については、未検討の課題として残されている。

宮下祥子は、生涯にわたってハンセン病患者と親交があったことで知られる哲学者の鶴見俊輔に焦点を当て、志樹逸馬との具体的な交際のありようを論じている<sup>(7)</sup>。やはり遺族から提供を受けた遺

稿ノートを通して、当初は相互理解に齟齬が見られた二人が、やがて信頼関係で結ばれるまでの過程を時系列でたどり、両者の交渉の具体的様相を明らかにした。「ハンセン病問題研究が閉じられた世界で完結しているという問題点」<sup>(8)</sup>を乗り越える試みとして、療養所の外部の知識人との相互交渉を新たなテーマとして提示している。また、志樹逸馬を理解するうえで時間軸を最初に持ち込んだ研究ともいえる。

若松英輔は、長島愛生園の精神科医であった神谷美恵子に影響を与えたハンセン病患者の代表として志樹逸馬を取り上げ論じている<sup>(9)</sup>。神谷美恵子という非病者の知識人が、ハンセン病患者である志樹逸馬からいかに学び、影響を受けて自らの思索を深めたかを指摘している。こうした見方は、私たち非病者の側がハンセン病問題からいかに学び得るかという点で、今後ますます重要になると考えられる。

以上の先行研究の検討を通して、本稿のねらいを以下のように定めることができる。①志樹逸馬の詩作の過程を、時系列を意識してたどり直すこと。②志樹逸馬の詩に、ハンセン病の影響がどのようにあらわれているかを検討すること。③志樹逸馬と交際のあった非病者との相互影響を明らかにすること。以上の三点である。

## 2. 1949年の転機

志樹逸馬の詩作は、18歳になる1935年あたりから始まる。当初は、先に見たとおり三つの筆名を用い、童謡・民謡・小曲・詩と、ジャンルも定まっていなかった。しかし32歳となる1949年から、筆名は志樹逸馬のみの使用となる。この時点で、詩人・志樹逸馬が誕生したといっても過言ではない。この事実注目して志樹逸馬が論じられたこと

(3) 『ハンセン病文学全集7 詩二』（皓星社、2004年）巻末の「著者紹介」に、「志樹逸馬」「宝山良三」以外の筆名として「宝山良一」が挙げられているが、掲載誌及び作品名は確認できなかった。

(4) 『志樹逸馬詩集』（方向社、1960年）所載の原田憲雄・原田禹雄「あとがき」で、志樹逸馬が作品を発表した園内誌として挙げているうち『愛生』『多磨』（『山桜』を含む）、『菊池野』（ただし、作品発表があるのは『桜の影』『始良野』『高原』には作品が確認できるが、『楓』『青松』には作品が確認できなかった。

(5) 亀田政則『志樹逸馬の〈言語宇宙〉—「根拠」への憧憬と讃美』（『キリスト教的言語行為』勁草書房、1993年）。

(6) 込山志保子『志樹逸馬の詩にみる信仰—こころのことはをさく』（『恵泉アカデミア』第10号、恵泉女学園大学人文会、2005年12月）。

(7) 宮下祥子『鶴見俊輔のハンセン病患者との関わりに見る思想—1953～1964年を中心に』（『同時代史研究』第10号、同時代史学会、2017年）。

(8) 前掲、宮下「鶴見俊輔のハンセン病患者との関わりに見る思想」にて引用されている廣川和花「ハンセン病史研究のパーспекティヴ—書評へのリプライにかえて」（『歴史科学』2013年1月）中の言葉。

(9) 若松英輔『詩と出会う 詩と生きる』（NHK出版、2017年。増補版、2019年）。



は、これまでなかった。

もっとも、以下に見るように、志樹逸馬の周辺にいた人たちのあいだで、そのことが意識されていなかったわけではない。

例えば、『愛生』1949年8月号より詩の選者をつとめた永瀬清子は、志樹逸馬の追悼文のなかで、次のように志樹作品の詩風の変化を述べている。「私が見はじめたはじめの頃は、エネルギーな詩、又いかにも病とあらがう感じの見える詩がありました。しかしその頃が曲がり角で、志樹さんの詩は非常に内面的なものになり（以下略）」<sup>(10)</sup>。

また、愛生園の入所者で、詩の後輩であった島田等は、志樹の追悼文のなかで、彼が「異例に長い」「詩的経歴」を持ちながらも、「詩の中に自己を確立」したのは、「それは戦後数年をへた昭和二四、五年以後である」と、永瀬とほぼ一致した見方を示している<sup>(11)</sup>。

永瀬清子・島田等が共通して指摘している1949年前後の変化について、本稿では、具体的な詩作品を取りあげて検討してみたい。

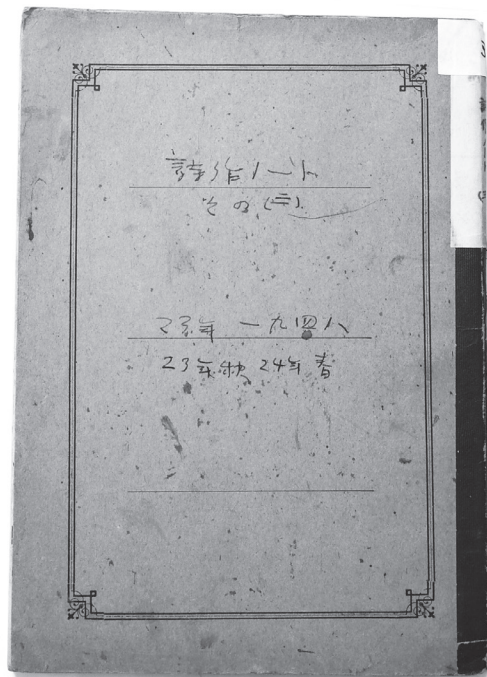
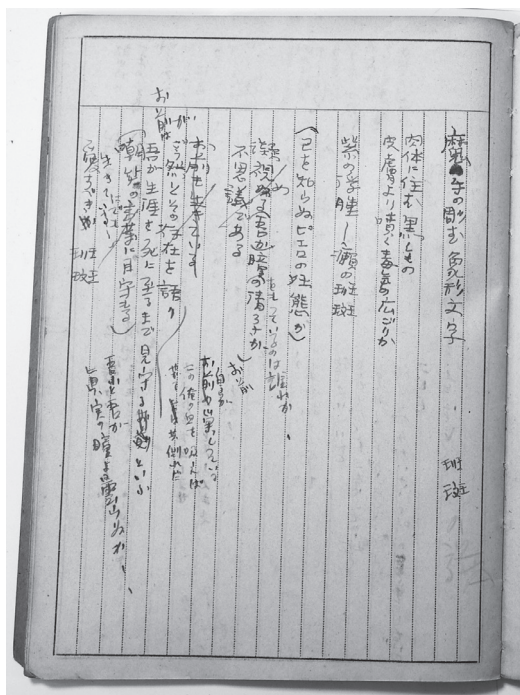
### 3. 病いととの格闘—詩「班斑の譜」創作過程

志樹逸馬がハンセン病にこだわり、病いととの闘いを主題に多くの詩作をしていることは、複数の指摘がある。亀井政則は、「二十八年間」「癩者」「ライ者のねがい」「ハンセン氏病者のねがい」「肉体と心」といった詩を取りあげ、直接・間接にハンセン病に深く影響された表現に注目している<sup>(12)</sup>。

また、島田等も、志樹逸馬の追悼文のなかで、「かれを詩にかりたてた根源的な衝動を仮定すれば、それは神でも愛でもなくらいであった」と指摘している<sup>(13)</sup>。

しかし、その両者に、時系列を意識した実証はない。本稿では具体的な作品を取りあげ、創作過程に注目しながら、志樹逸馬作品とハンセン病の影響関係を明らかにしてみたい。

ここで取り上げるのは、1949年前後に複数のテキストが残る詩「班斑の譜」<sup>はんもん</sup>という作品である。「班斑」とは、化学療法による治療を受ける以前に特有のハンセン病の皮膚症状である。「斑紋」と書くのが一般的だが、本稿では志樹逸馬の表記にな



写真③④ 詩「班斑」草稿（『詩作ノート3』1948年秋～1949年春）

(10) 永瀬清子「志樹逸馬さんの死を悼む」（『愛生』1960年3月号）。

(11) 島田等「共感と不満—志樹逸馬から受くべきもの」（『愛生』1960年3月号）。

(12) 前掲、亀井「志樹逸馬の〈言語宇宙〉」。

(13) 前掲、島田「共感と不満」。

作品① 班斑

魔手の彫む象形文字

肉体に住む黒いもの  
皮膚より噴く毒気の広がりか

紫の浮腫―癩の班斑

〈己を知らぬピエロの吐息<sup>〔マ〕</sup>「吐息？」か〉

凝視める（吾が）瞳（の清きさか）をもつてゐるのは誰れか  
不思議である

お前自らがお前の巢くつてゐる  
この俺の血を吸えば  
やがて□は共倒れだ

お前も生きてゐる  
が――然とその存在を語り  
お前は吾が生涯を死に至るまで見守るお前といふ  
（嘲笑の言葉に用ずるもの）  
にでも

吾れと吾が  
真実の瞳よ曇らぬか

生きてゐる  
愛すべきか班斑

らって「班斑」と記す。

志樹逸馬の遺稿ノートのうち、『詩作ノート3』（1948年秋～1949年春）には、「班斑」というタイトルの草稿が残されている（作品①）（写真③④）。これが、この詩に関する初出である<sup>(14)</sup>。

なお、推敲の過程がわかるように、ノート中、斜線で抹消されている箇所は、取消線で示すことにする。また、[ ] は筆者の注記である。

ここには、志樹の思考や感情の揺れを示すように、かなり錯綜した推敲の跡が見られる。

この詩はやがて、「班斑の譜」と改題されて、『愛生』1949年4月号に掲載される<sup>(15)</sup>（作品②）。藤本浩一の選で「三席」に入選している。

先のノートの草稿と比べると、整序されてはいるが、「肉体に住む黒蜘蛛」「皮膚より噴く毒気」「癩」といった字句が並び、「愛すべきか？」という迷いともとれる自問がなされる。何よりも、ハンセン病特有の皮膚症状である班斑は、「生きて

いる」のである。いまだに深刻な病いとの格闘の場から、この詩が生み出されていることがわかる。

さらにこの作品は、大江満雄編『いのちの芽』（三一書房、1953年）に収録される。ちなみに『いのちの芽』とは、らい予防法闘争のさなかに刊行された全国のハンセン病療養所の73人の詩人たちの作品をおさめた合同詩集で、志樹逸馬は参加者のなかでは最多の18篇の詩が採用されている。その最初の一篇をこの詩が飾った。そのさい、次のような改変がなされた<sup>(16)</sup>（作品③）。

前出のまがましい語句や迷いの言葉はすべて削ぎ落とされ、わずか6行に整序されたかたちに結晶している。病いとの格闘のさなかから詩を生み出すというよりは、「しずかに読んでいる」自己を遠隔から見つめるような変化が見られる。

永瀬清子が指摘するように、「いかにも病とあらがう感じ」だったものが、「非常に内面的なものにな」っていることがわかる。

(14) 『詩作ノート3』（1948年秋～1949年春と表紙にある）。このノートのほかに、『詩集 その三』（1948年11月と表紙にある。『愛生』1949年4月号に掲載されたバージョンの清書）、『詩集 その四』（1952年と表紙にある。『いのちの芽』に掲載されたバージョンの清書）のノートが残されている。

(15) 志樹逸馬「班斑の譜」（『愛生』1949年4月号）。

(16) 大江満雄編『いのちの芽』（三一書房、1953年）。

作品② 班斑の譜

魔の手の彫む象形文字  
肉体に住む黒蜘蛛の皮膚より噴く毒気の広がりか  
紫の浮腫―癩の班斑  
己れを知らぬピエロよ  
巢喰つているこの俺の血を吸つて居れば  
やがては 共倒れだ  
が お前は俺の生涯を死に至るまで見守るとい  
う  
…… 吾と吾が  
…… 真実の瞳よ 曇らぬか  
……  
愛すべきか？  
生きている班斑。

作品③ 班斑の譜

魔の手が彫る象形文字。  
紫の浮腫―班斑。  
魔王が  
俺の生涯を見守る。  
俺の真実を見る瞳は曇らぬ。  
おれは生きている班斑の譜を、しずかに読んでいる。

この時期の前後、彼の身上に何が起こったのであろうか。

ハンセン病との格闘にあたり、決定的な出来事として、プロミン治療開始が挙げられる<sup>(17)</sup>。プロミンはハンセン病の治療に効果を示した最初の化学療法薬で、これによって、班斑のような皮膚症状は急速に消滅することとなった。

志樹逸馬による自伝的エッセイ「いかに生きるか」(『思想の科学会報』1958年1月20日)の1949年(月不明)の項目に、「新薬プロミン」についての記述が登場する<sup>(18)</sup>。「治療室で、私は蒼い静脈から冷たく腕に流れ込む透明な液体を凝っと見守る。ああ、そのどんな小さな灯でもいい、それは数千年口を緘していた化石のつぶやきにもひとしい喜びなのだと思う」と、その喜びを表現している。また同年10月、「菠薐草を煮たり洗濯をしたり、はじめて体が軽く動いているのに気がつく。

プロミンが効いて来たのだと思う」と、治療効果の実感を記している。

志樹はまた、「班斑」の最初の草稿が書かれた『詩作ノート3』(1948年秋～1949年春と表紙にある)の中で、「班斑」よりも早い段階で「プロミン」という詩の試作を4頁にわたって書きつけている<sup>(19)</sup>。「快くなるだろうか?…私も/新薬・プロミン注射/(悪魔がどこかで嘲笑っている)」の書き出しからなるこの詩は、やはり病いとの格闘を主題としている。この詩はそのままのかたちで発表されることはなかったが、やがて「プロミン」という同題の詩が、およそ2年後の『愛生』1951年12月号に発表された<sup>(20)</sup>。この作品では、プロミン治療によって、ハンセン病との格闘は、すっかり「振りかえる過去」の話としてうたわれている。

1948年秋～1949年春の草稿「班斑」、1949年版「班斑の譜」(『愛生』)に見られた禍々しい字句、

(17) 多磨全生園入所者の詩人・歌人の光岡良二は、1949年に入るとプロミン治療をテーマとした短歌が多くなることを指摘し、敗戦とプロミンによる精神的・肉体的な解放のうえに患者と療養所の「戦後」が拓かれてゆくと述べている(光岡良二「書誌・『多磨』五十年史 連載第30回」『多磨』第55巻第6号、1974年6月)。この文献は、星名宏修氏のご教示による。記して感謝申し上げます。

(18) 志樹逸馬「いかに生きるか」(『思想の科学会報』1958年1月20日)。

(19) 志樹逸馬「プロミン」(『詩作ノート3』1948年秋～1949年春と表紙にある)。

(20) 志樹逸馬「プロミン」(『愛生』1951年12月号)。



錯綜した思考過程は、そのまま化学療法以前のハンセン病との格闘を意味しており、治療効果があられて以降、それらの迷いをあらかず語句はきれいに消え、最終的にはわずか6行の完成形として1953年版「班斑の譜」(『いのちの芽』)として発表されたのである。

転機となったプロミン治療が始まった1949年と同年、『愛生』誌は、詩人・永瀬清子を詩の選者として迎える。筆名を「志樹逸馬」のみに定めるのも1949年からのことである<sup>(21)</sup>。

「班斑の譜」の創作過程における変化を、1948年・1949年・1953年とたどってきた。この作品を仕上げる試行錯誤を通して、詩人・志樹逸馬としての誕生を見ることはできないだろうか<sup>(22)</sup>。

#### 4. 大江満雄との交流の軌跡—詩「癩者」創作過程

志樹逸馬は生前から、園外のさまざまな人に見いだされ、親交を結び、自身の文学を育んでいった<sup>(23)</sup>。本稿では、詩人・大江満雄との交流の一端を、詩「癩者」完成までをたどることで見てみよう<sup>(24)</sup>。

この作品の遺稿ノートにおける初出は、『詩集 その三』(1948年)所載の「癩者は生きている」である<sup>(25)</sup>(作品④)。この草稿には、詩句のところどころに、志樹逸馬自身が「」でくくった形跡があり、これは抹消して読まないと意味が通じないと考え、本稿では意味が取りやすいように、取消線を加えたことをお断りしておく。

この作品は、初めて活字化されるにあたって、

推敲の手が入り『愛生』1950年5月号に発表された<sup>(26)</sup>(作品⑤)。

最終的にこの詩は、やがて大江満雄編『いのちの芽』(三一書房、1953年)収録にあたって詩句が整理され、「癩者」と改題された(作品⑥)。

この三つの異なるバージョンの作品を時系列で比較すると、前項で見た「班斑の譜」と同様、ハンセン病との格闘の表現が、徐々に整序されたかたちにまとめられてゆく変化の過程が確認でき興味深い。ここでは大江満雄という外部の詩人と志樹逸馬との相互の影響関係の過程をたどる事例として取り上げてみたい。

『いのちの芽』は、大江満雄が編集にあたり、各園を代表する編纂協力委員を置き、長島愛生園では志樹逸馬が森春樹とともにその任にあたった<sup>(27)</sup>。また、『いのちの芽』の巻末には大江による「世界の癩に関する年譜」が収録されており、志樹は、多磨全生園の国本昭夫(国本衛)とともに資料提供で協力している<sup>(28)</sup>。志樹の日記には、『いのちの芽』編集の過程で、大江とのあいだに頻繁な手紙のやりとりがあったことが記されている。

もともとこの合同詩集は、大江によって『来者』という書名が予定されていた。「来者」とは、「来たるべき者」の意味で、ハンセン病患者を、我々に未来を啓示する存在であると考えた、大江による造語である<sup>(29)</sup>。しかし、出版社側の意向で、『いのちある限り』が提案された。大江はこれを退けて、『いのちの芽』という書名に落ち着いた経緯がある<sup>(30)</sup>。

(21) 前掲、込山「志樹逸馬の詩にみる信仰」のなかで、「志樹逸馬」の筆名の意味を「死期何時迄」、「つまり自分の死期が何時で、何時迄生きるのか」という意味の当て字ではないか」という推測を、志樹の遺族・河内山耕氏が述べており、示唆的である。

(22) 本文で述べたことのほかに、志樹逸馬の略歴の中で特に重要な出来事として、少し早い時期のことではあるが、1942年1月、クリスチャンで歌人の治代と知り合い、キリスト教教会に入会し、同年5月15日に結婚していることが挙げられる。志樹逸馬の詩はキリスト教の信仰から多大な影響を受けているが、この主題については、前掲、亀田「志樹逸馬の〈言語宇宙〉」に譲る。

(23) 今回の展示では、代表的な4人の人物、藤本浩一、永瀬清子、大江満雄、鶴見俊輔を中心に、交流の軌跡をたどった。4人それぞれの志樹逸馬評と、志樹の側から、それぞれの人物とのかかわりを記述した自筆ノートもあわせて展示することで、相互の影響関係をさぐった。

(24) ハンセン病文学史上における大江満雄の役割の重要性については、木村哲也編『癩者の憲章—大江満雄ハンセン病論集』(大月書店、2008年)、木村哲也『来者の群像—大江満雄とハンセン病療養所の詩人たち』(編集室水平線、2017年)を参照のこと。

(25) 志樹逸馬「癩者は生きている」(『詩集 その三』1948年)。

(26) 志樹逸馬「癩者は生きている」(『愛生』1950年5月号)。

(27) 大江満雄「詩集『いのちの芽』と予防法改正運動」(『愛生』1953年10月号)。ちなみに他園の委員は、多磨全生園・厚木勲、国本昭夫、菊池恵楓園・重村一二、星塚敬愛園・島比呂志、大島青松園・中石としお、恵美かおる。栗生楽泉園・御雄二。

(28) 「国本」が誤植で「岡本」となっている。

(29) 大江満雄「来者は追うべし」(『つくられた断層』長島愛生園患者自治会文芸協会、1968年)。

(30) 前掲、大江「詩集『いのちの芽』と予防法改正運動」。

作品④ 癩者は生きている

病み爛れた汚辱の肉塊を落葉の様に土に沈めて  
日々哀しみの苦汁を吸って生きるもの  
癩者

—すこやかな生命の芽よ 延びないか—

私をとらへるものは

変貌した顔の見醜（みにく）さか

神経痛の悶えか

高熱の喘ぎか

全身の麻痺か

白痴の妄想か

無か

×

この土の冬

凍てた地上で寝た医者がいる

この荒土に慈しみの瞳をそ、いで 花を咲かせようと

生涯を「全うした」かけている園芸家がいる

この干からびて固い土を 素手で砕こうとしている牧師がいる

朝に夕に「水を与へて」己が青春の水を捧げて 労を惜しまない白衣の少女

達がいる

この土の生活のうめきを じつと己が胸の血潮のしたたりの様にたじろぎもせ

ず聞いている詩人がいる

×

「あゝ、渴いた心に

どうして

この 光と空気と水とが 吸収されずにいるものか

私は生きているのだ 生きる」

ああ ひかりよ 空気よ 水よ

吸つても 吸つても 渴く心よ

だが私は 生きているのだ

汚れたまゝでいい、

こゝには成【ママ】春を夢見る鞭がある

沈黙の言葉がある

「生命が、真実の美を掴むのだ」

ひかりと 水と 空気と

人間の全身をぶつけた 叫喚が

浸透して来るではないか

私は 生きる 生きて

この血みどろな精魂をかたむけた

花

真実と美をつかむのだ

作品⑤ 癩者は生きている

病み爛れた汚辱の肉塊を落葉の様に土に沈めて  
日々哀しみの苦汁を吸って生きるもの 癩者

—すこやかな生命の芽よ、延びないか—

私をとらえるものは

変貌した顔の見醜（みにく）さか

神経痛の悶えか

高熱の喘ぎか

全身の麻痺か

白痴の妄想か

無か

×

この土の冬

凍てた地上で寝た医者がいる

この荒土に慈しみの瞳をそ、いで 花を咲かせようと 生涯を全うした園芸家

達がいる

この土の生活のうめきを じつと己が胸の血潮のしたたりの様にたじろぎもせ

ず聞いている詩人がいる

×

「あゝ、渴いた心に

どうして

この 光と空気と水とが 吸収されずにいるものか

私は生きているのだ 生きる」

ああ ひかりよ 空気よ 水よ

吸つても 吸つても 渴く心よ

だが私は 生きているのだ

汚れたまゝでいい、

こゝには成【ママ】春を夢見る鞭がある

沈黙の言葉がある

「生命が、真実の美を掴むのだ」

ひかりと 水と 空気と

人間の全身をぶつけた 叫喚が

浸透して来るではないか

私は 生きる 生きて

この血みどろな精魂をかたむけた

花

真実と美をつかむのだ

生命が、真実の美を掴むのだ

こゝには沈黙の言葉がある

生命が、真実の美を掴むのだ

作品⑥ 癩者

病み爛れた汚辱の肉体。

日々腐蝕する哀しみの苦汁を吸って生きるもの、癩者。

——新しい生命よ芽生えないか。

私を描えるものは

変貌した醜さ。

神経痛の悶え。

高熱の喘ぎ。

全身のしびれ。

白痴的妄想。

しかしここには生涯をささげている医者がある。

荒土に花を咲かせている園芸家がある。

ひからびて固い心を砕こうとしている牧師がある。

己の青春を捧げて労を惜まない白衣の少女がある。

ここの生活のうめきを凝つたとたじろぎもせず聞いている詩人がいる。

光よ

空気よ

私の心は吸っても吸っても渴く。

けれども私は生きているのだ。

ここには成長を夢見る沈黙の言葉がある。

心の鞭がある。

この『いのちの芽』の書名は、戦後のハンセン病詩人たちの作品に、「芽」という語句がよく出ること大江満雄が敏感に気付いたことが背景にあった。大江は当時、ハンセン病者の詩について論じた文章で次のように述べている。

「(戦後のハンセン病者の詩には) このように『芽』という言葉がよく出ます。とくに『芽』という言葉が戦後に、出たわけでないとしても、戦後の芽生えているものに非常にちがうものがあるということは大きな事実です」<sup>(31)</sup>。

実際、『いのちの芽』には、「せめて/指よ/芽ばえよ」(森春樹「指」)、「清厳な/緑の生命/の芽」(中本一夫「萌芽」)、「スプンで種を蒔き、/あしたへの芽生えを待ってきた」(森中正光「指」)のように、一瞥しただけでも「芽」という語句を用いた詩を多く見つけることができる。

志樹逸馬も、「癩者は生きている」で、「すこやかな生命の芽よ、延びないか」とうたっており、『いのちの芽』という詩集全体のタイトルは、この志

樹の「生命の芽」という詩句からとられたのではないかという推測が成り立つ。

また、『いのちの芽』の帯文は、以下のとおりである。

「癩者は生きている。地の果の死をこれほどまじかに見つめ、人間の厭悪をこれほど身じかに感じながら、それでも、彼らは、なお、人間の生と愛情を歌わずには生きていられない。/こんなにも微かな生の芽ばえに、誰がこれほどの喜びを歌いあげたであろうか。そこには生を病む現代人間社会を救済する健康な病理学がある。/癩者は生きている。そしてその眼は、政治を直視し、人間のゆくえと、作らるべき未来の社会をじっと見つめている」。

この帯文を大江が書いたかどうかは断言できないが、「癩者は生きている」という志樹作品のタイトルとまったく同一の表現が二度繰り返されており、また「生の芽ばえ」という「芽」を含んだ語句も挿入されていることから、無関係とは考え

(31) 大江満雄「ハンセン氏病者の詩」(『芽』〔第2次『思想の科学』〕1953年5月号)。



られない。『いのちの芽』のコンセプト自体を、大江は志樹との交流から構想した可能性を指摘しておきたい。

この間の事情を示す資料を、志樹逸馬の日記や遺稿ノートに見出すことができる。

「大江先生から小生の詩 非常にいいものがある」とほめられる。癪者の詩、これを中心にぜひ出させて欲しい 六篇以上出したいと 一篇が原則であるにもかゝらず力を入れ激励して下さる」<sup>(32)</sup>。

「大江満雄先生が「<sup>マ</sup>ライ者は生きている」(二十四年作)に最も興味をもたれたと聞きうれしかった。(略)「癪者は生きている」との叫んだ声にそうだと深くうなづかれ、更に前へ方向をうながされた気がした」<sup>(33)</sup>。

これらの記述からは、大江満雄が、志樹逸馬の作品の中では「癪者は生きている」ないし「癪者」の詩に注目して高く評価していたことを知ることができる。

さらに興味深い記述がノートには残されている。志樹は、大江から届いた書簡をそのつど筆写しており、そのなかでも大江が志樹作品のなかでは「癪者」を高く評価し、この作品のタイトルには、「来者」がふさわしいと述べている箇所があるのだ。

「詩集「いのちの芽」－来者のため 私のため  
大江満雄先生から寄せられた手紙…  
一九五二年十一月 非常によい詩がありました。  
(略)

「癪者」は内容がよいと思います。(略) 題のつけ方、あまり内在論的です。あなたには超越性があるのですから題は癪者とせずみつめている世界を書く方がよいと思います。(略) むしろ「来者」が適当だと思います。私が「来者」と題名つけたの

は癪者たちは決して苦悩だけ呪詛だけ感傷だけで低回していないと思ったからです。苦悩を示し乍らかような超越性未来性を示しているところに今日の詩人の姿があると思います」<sup>(34)</sup>。

特に後半の、「癪者たちは決して苦悩だけ呪詛だけ感傷だけで低回していないと思ったからです。苦悩を示し乍らかような超越性未来性を示している」という大江の言葉に、ハンセン病患者たちを「来者（来るべき者）」と発想した根拠の一端を見ることができる。

「癪者」というタイトルは、「来者」とするのがふさわしいとする大江の示唆に従って、最終的にタイトルを「来者」と改めて清書された作品の存在が、このたび遺稿ノートから判明した（写真⑤）<sup>(35)</sup>。『いのちの芽』に載った「癪者」とほぼ同内容ではあるが、「来者」のタイトルでは未発表のままとなった作品である。「癪者は生きている」の草稿（1948年）、「癪者は生きている」『愛生』初出（1950年5月号）、「癪者」『いのちの芽』掲載（1953年）の過程で、産み落とされた幻の詩「来者」（1952年）の詩稿が、今回の展示で初めて陽の目を見ることとなったのであった。

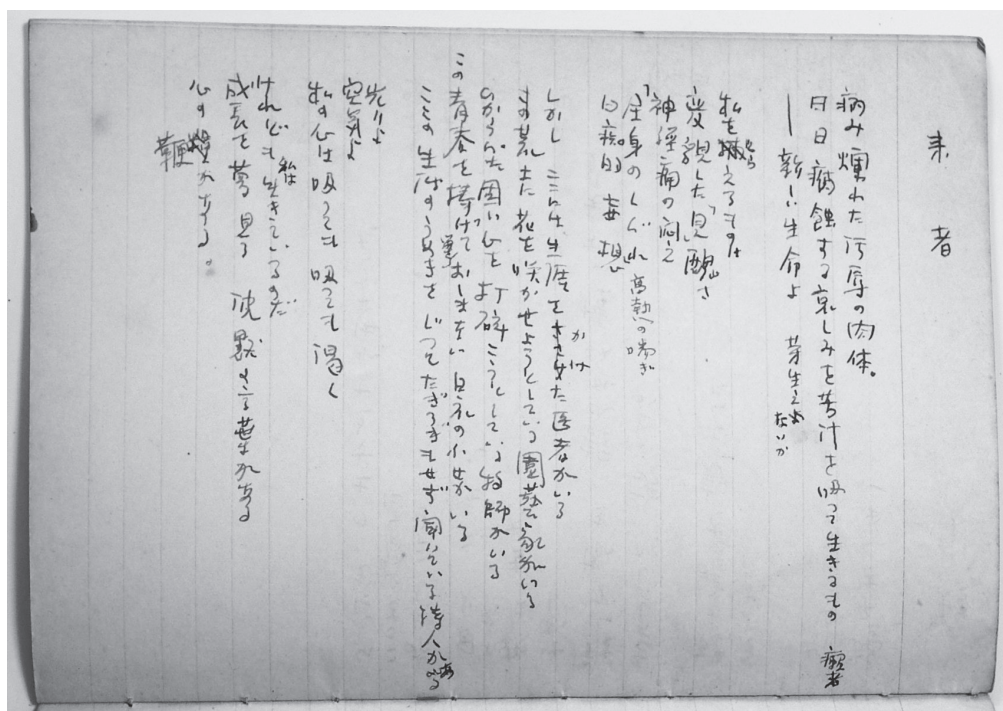
これはたんに、外部の「指導者」によってハンセン病療養所の詩人が「指導を受け、救われた」という一方的な関係ではなく、大江の側もまた志樹に影響を受けて自らの思索を深めていくという、相互影響の所産として理解されるべき事象ではないだろうか。「癪者」創作過程が示しているのは、ハンセン病患者を「憐憫」の対象として関係を固定化してとらえる「救癪」とはまったく別の事実なのである。

(32) 『日記』（1952年11月25日）。実際には志樹逸馬の詩は、『いのちの芽』の参加者では最多の18篇が掲載された。

(33) 『詩作ノート13』（1955年6月～1956年5月）。

(34) 『凡人調』（1952年11月）。

(35) 志樹逸馬「来者」『詩集 その四』（1952年）。



写真⑤ 未発表の詩「来者」(『詩集 その四』1952年)

## 5. おわりに一志樹逸馬の再発見に向けて

本稿では、これまで十分に明らかにされてこなかった以下の三つの課題に挑んだ。①志樹逸馬の詩作の過程を、時系列を意識してたどり直すこと。②志樹逸馬の詩に、ハンセン病の影響がどのようにあらわれているかを検討すること。③志樹逸馬と交際のあった非病者との相互影響を明らかにすること。

その結果、「班班の譜」や「癩者」といった具体的な作品の複数の異なるバージョンの作品を時系列にたどることで、志樹逸馬がハンセン病との格闘という主題を、プロミン治療をへることで解決して以降、やがて詩人としての完成に向かい、その推進力に、大江満雄という外部の詩人との交流が大きな役割を果たしていた過程を明かにできたのではないかと考える。以上のことは、1950年代に入って傑作群を生み出す詩人・志樹逸馬の誕生にとって、欠かすことのできない要因となったのである。

今後、志樹逸馬への注目が広がれば、彼に「ハンセン病文学」や「ハンセン病詩人」というレッ

テルを貼ることなしに、詩人としての評価が進むことも予想される。しかし、彼がハンセン病と格闘し、もがき苦しむ過程を経なければ、1950年代の詩人としての文学的達成はなかったというのが、本稿の明らかにしたところである。

論じ残したことは多いが、やはりキリスト者としての「信仰」との関わりについて付言しておきたい。すでに亀田政則が先行研究で明らかにしているように、志樹逸馬が「あるがままの自己」を「キリストに委託して生きる道を見出」す過程も<sup>(36)</sup>、本稿で試みたように、遺稿ノートと発表された作品とを併せて時系列でたどることで、より深く理解出来るのではないだろうか。

また、島田等が、志樹逸馬に対して「らいの現実を動し難いものとして固定的に認識し」ている<sup>(37)</sup>、と批判的に述べている論点についても同様に、没歴史的に理解するのではなく、時系列で動的にとらえ直す余地を残していると考えられる。

本稿が、志樹逸馬という60年前に没した詩人の作品を現代によりみが見えさせ、未来の読み手に新たな発見をうながす一助とすることができたなら幸いである<sup>(38)</sup>。

(36) 前掲、亀田「志樹逸馬の〈言語宇宙〉」。

(37) 前掲、島田「共感と不満」。

(38) ギャラリー展開催、及び本稿執筆にあたり、志樹逸馬の遺族・河内山耕氏には遺稿ノートの提供をはじめ多大な協力を得た。記して感謝を申し上げる。